

図書館蔵書に対する評価は、その量よりも質にあることは言うまでもないが、その質的条件の中にどのような稀観本（きこうぼん）

本館 **稀** **観** **本** 所蔵

世間に流布されていない珍しい書物)が収蔵されているかがある。ついで、ご専門のお立場から本館所蔵の稀観本をご紹介いただく

の中から

西洋服飾稀観書(9) ホラルとヴァトーのファッション版画集

文化女子大学教授 石山 彰

この本は、17世紀半ばと18世紀初めの2つの時期に属する、それぞれ最も著名な2人の画家によって描かれた。本来は独立した3種のファッション版画集であるが、たまたま合本のかたちをとったという変わり本の1種で、綴じ順から記せば、次のようになる。〔383, 13W〕 13cm×19cm

- 第① Vatteau ; Figure de mode, Paris, vers 1720.  
ヴァトー；流行の姿絵 パリ 1720年ころ。
- 第② Watteau ; Figures françaises et comiques, Paris, vers 1720. ヴアトー；フランス人の姿絵と喜劇俳優 パリ 1720年ころ。
- 第③ Hollar, W. ; Aulla Veneris sive Varietas foeminini Sexus diversarum Europae Nationum differentiag habituam, Londoni, 1644.  
ホラル・ヴィナスの庭、または異なった装いをしたヨーロッパ諸国に住む女性の多様さ（いわゆるヨーロッパ各国女性の服装）ロンドン 1644年。

昔は——フランスなどでは今でも——各自の趣味性に合わせて独自の製本を行なった。この本も、だいたい同じ大きさのエッチング集であるところから、原所蔵者であったカルル・ジャン・クロンテット氏——知名の人物らしいが目下調査中である——が、たまたま1冊にまとめて造本し

たものを購入したにすぎない。発行順に従って第③の著作から述べることにしよう。

英語名をウェンセスラス・ホラー Wenceslas Hollar, ドイツ語名をヴェンツェル・ホラー Wenzel Hollar, チェコ語名をヴァークラフ・ホラール Václav Hollar と呼んだ著者は、おもにイギリスで活躍した17世紀中期の最も著名な銅版画家であると同時に、ファッション版画の父といわれている。1606年、当時神聖ローマ帝国の首都として名高かった今のチェコスロバキアのプラハに生まれた。1627年ドイツのフランクフルトに渡り、そこでデューラーの影響を受けた師M・メリアン兄の門に入ってエッチングの技術をみがいたのち、同36年までの7年にわたってストラスブル、ケルン、アントワープ、アムステルダムなどに遊び、幾つかの作品集を著わした。イギリスに渡って活躍するのはその後であり、当時のドイツ皇帝フェルディナント2世への使節としてケルンを訪れた14代アランデル公の招請によるものであった。彼は同公邸に寄寓して制作を続け、侍女トランシーと結婚、同39年には皇太子（後のチャールズ2世）の絵画教師を勤めている。42年、市民革命が始まると武器をとってこれに参加し、44年には議会軍の捕虜となったが、ベルギーのアントワープにのがれ、1652年再びイギ

ホラー作 ロンドンの市長夫人 一六四九年 オランダ風のフェルト帽 レースの縁飾りのある三重のラフ（ひだえり） たくり上げた重々しいオーバー・スカーフ



D. Majoris sive Praetoris Londinensis Vxor is hab

ホラー作 ロンドンの職人の妻 一六四九年 左の市長夫人とは対照的に 全般に簡素で ビューリタン風であると同時にオランダ風である



Civis vel Artificis Londinensis Vxor.

リスに帰るまでの8年間をそこで過ごした。この著作の初版は元来この期のものであるが、のち数度にわたって刊行されたため、作品個別のデータは1636年から50年までの範囲に及んでまちまちになっている。したがって、このドイツ語ネーム版は50年以後に刷られたものであろう。66年には英王室の遠近法画家として迎えられている。

このように、ホラーの作品のレパートリーは風景、絵地図、地勢図、建築図、紋章、肖像など広範に及ぶが、ロンドン景観および服飾の銅版画は、とりわけ名が高い。服飾図集では他に「イギリス婦人の服装」Ornatus Muliebris Anglicus or the Several Habits of English Women, Lond., 1640, 「世界の女性」Theatru Mulierum, Lond., 1643, 「四季」The Seasons, Lond., 1643, などがある。イギリスで彼をファッション版画の父と唱えるのは、たとえばマフ(毛皮製の手ぬぐめ)とかマスク(目かくし)など、作品中の幾つかの風俗が16, 17年を経てから流行することになるからである。

さて、第①と第②の作者ヴァトーに移ろう。

フランス18世紀の最も偉大な画家、とりわけ<sup>フェート・ガラン</sup> 雅宴画の創始者として名高いヴァトーは、一般にはワトーの名で知られるが、ここではワルナンの“フランス語固有名詞発音辞典”に従った。事実、第①の著者名のつづりはVで始まり、第②はWで始まっているのをみると、ヴァトーが本来なのであろう。この2冊は、いずれもパリのモンパルナスに近いサンジャック・エ・ジョール通りの宮廷版画家ドゥシャンジュから発行されており、特に第①はヴァトーが自ら刻版してトマッサン2世が仕上げを行なっている貴重な7枚(扉を除く)からなっている。これに対して第②の作品はヴァトーの素描をもとにドゥブラース、コシャン、トマッサンの3人によって刻版された8枚の作品で構成されて

いる。もっと細かくいえば、第①には一連のジュトコールを着た男子4態と3態の婦人、第②には農夫姿のデュミラール、ポワッソン、巡礼にふん(扮)したデマール嬢など男女5態の喜劇役者と他に2態の婦人が描かれており、その中の1態は明らかに、いわゆるワトー・(プリーツ)・ガウンを着ている。この服の名は当時の流行に寄与した彼の名にちな(因)んだ呼称である。

ジャン・アントワース・ヴァトー Jean Antoine Watteau は1684年、ルイ14世の征服によって仏領に合併されたばかりの旧フランドル領ヴァランシエンヌの瓦職親方の次男に生まれ、初め土地の田舎画家ゲランに絵を学んだ。1702年、17歳の時パリに出て絵の下請職人となったが、このころから街の人々や生活のエピソードを早がきで素描するのに特有の天分を発揮した。この素質は多分に市民風俗画の伝統をもつフランドルという風土からつちか(培)われたものであろう。演劇好きの画家クロード・ジローの助手として働いたのは、翌1703年からの5年間で、その間、彼自身もまた無類のイタリヤ風喜劇のとりこ(虜)になった。第②の著作に見られるコメディ・デラルテの喜劇俳優たちの姿は、彼の油絵に登場する俳優たちと共に特異な題材の一つになっている。のち、フランス最大の室内装飾家と呼ばれたクロード・オードラン3世の弟子として協力し、女性的な曲線や官能的な唐草模様などに独自の軽妙さを発揮した。1709年、一時ヴァランシエンヌに帰ったが、翌年再びパリにもどり、次第に洗練されたパリ風の優雅な画境を開拓していった。代表作「シテールへの船出」は1717年33歳の時のアカデミー入会申請作品であり、また「ジュルサンの看板」は死の前年1720年の傑作である。この両著とも死の直後の刊行で、その10年ほど前の作と推定される。



ヴァトー作 ジュストコールを着た男 一七二〇年 帽子を小脇にかかえ 右手を懐手にじっと彼方を見つめている クラヴァットは有名なスティンケルグ風



ヴァトー作 農夫に扮したデュミラール 一七二〇年 彼は好んで喜劇俳優を描いた 裾にひだつげした軽快な衣装 杖にからまる藁は背景と共に農夫を象徴する

Dumirail  
en habit de paysan